

では信玄時代に活用された本町における軍事上の要衝とはなんであったか、それらの時代的変遷から見てみよう。

現存する古城跡、塁跡などの遺跡の中で、最も時代の古い城跡というものは、鎌倉時代の城塁遺構の見られる西保地内の小田野城跡である。この城跡は治承四年（一一八〇）、後白河天皇の皇子・以仁王の令旨に対して、甲斐源氏の中でいち早くこれに呼応して軍事行動を起こし、源頼朝による源氏再興、鎌倉幕府の創立に尽くした最大の功労者と目された安田遠江守義定が拠った旧跡と伝えられている。

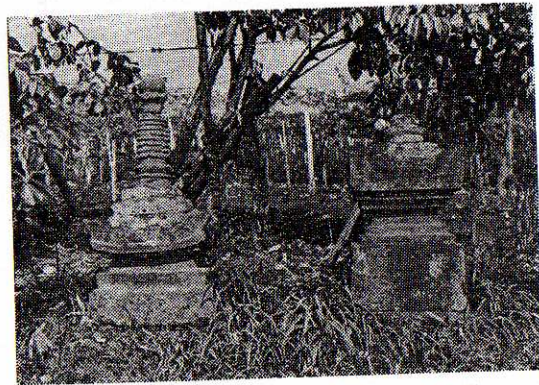
この小田野城は、通称小田野山に存在するところから、地元では小田野山城とも呼んでいるが、『甲斐国志』（古跡部）は、この城跡について、つぎのように記述している。

小田ノ山ノ城跡（西保下村）墟ハ下村・中村ノ中間ニ在ル御林山ナリ。此処ハ殘簡風土記ニ、巨摩郡東ハ小田ノ谷ニ限ルトアリ

戦国時代、武田氏の治世下における牧丘町は、町全体を形成する地形的条件ならびに地理的条件などの点において、武田信玄による領国経営のプロジェクトの中で、軍事上あるいは経済などの面でもきわめて重要視され、とくに軍事上の一大拠点として非常に高く位置づけられていたことが察せられる。

本町が軍事上の要衝地とされたのは、雁坂峠から秩父に通ずる秩父街道の関門に位置していたこと、また武田氏の居館であった甲府・躑躅ヶ崎の館にも通ずる間道のルートでもあったからといえるわけだが、要衝の地として町内各所に要害が設けられたのは、むしろ武田時代以前からのことであり、戦国期の武田氏はこれら往古の要害にそれぞれ手を加えて再利用したものと見るべきかも知れない。

#### 第四節 武田氏と牧丘町



足利尊氏・二階堂信濃守と伝えられている墓

あ。しかしながら、足利尊氏の法名は「等持院仁山妙義大禅定門」であって、「国清寺殿」との文獻は見当たらない。この点については、すでに『甲斐国志』でも「（尊氏は）京都ニテハ等持院、鎌倉ニテハ長寿寺院ト号ス。豆州名古屋ニ天長山浄居国清福寿万年禅寺ト云フ寺アリ。畠山国清ノ寺ナリ。関東五山ノ下、十利ノ上ト云フ格式ナリ。尊氏將軍ヲ国清寺トハ云フベカラズ」と指摘している。国志のいう畠山国清（号道誓）とは、足利氏の一門で南北朝前期の正平八年（文和二年、一三五三）から同十六年（康安元年、一三六一）まで関東執事をつとめた武将である。

いづれ浄居寺の牌子は、後世足利尊氏との混同があったものと思われるが、柳田聖山氏（前出）は、この法名について「浄居国清寺殿とは夢窓国師の父の院号ではないのだろうか」との興味ある見方を示している。国師の異母妹が乳のみ児を連れだつて浄居寺に国師を訪ねていること、浄居国清寺殿を国師の父と仮定した場合などから、国師一家が弘安元年に甲斐へ逃避し安住の地としたのは、案外牧荘の内ではなかったのだろうかと考えるのは飛躍しすぎる推測だろうか。

参考文献、資料

「甲斐国志」「尊卑分脈」「甲斐国社記寺記」「夢窓国師年譜」「夢窓国師・中世禅林主流の系譜」（玉村竹二・著）「日本の禅林美術史稿・夢窓派教団」（竹内尚次・著）「日本の禅語録・夢窓」（柳田聖山著）「太平記」

テ、山内広ク境ヲ巨摩郡ニ接ス。古時ハ西保村（中村、下村、北原、牧平）一<sup>帯</sup>小田ノ谷ト呼ビタルヲ、中世、牧ノ庄ヲ置キ、牧場トナシ、馬城ニ依リテ中牧、武河、西保等ノ分名出テ来タルト見エタリ。又小田氏モ此ノ処ヨリ出ツト云フ。今存スル所ノ城跡ハ安田遠江守義定ノ要害ナリ。山上ノ本丸ニ櫓跡、荒臺アリ。二ノ丸ニ龜石雌雄アリ。三ノ丸ニ蔵王権現ヲ祀ル箭竹アリ。叢生シテ節ヲ齊クス。柳清水、烏帽子石、呼石アリ。外川、子丑ノ方ヨリ回りテ溝トナル。西保川ハ南麓ヲ東流ス。此ニ至リテ鼓川ト名ツク。或ハ城溝ニ水ヲ蓄フル故ニ堤川トモ云フ。（略）

小田野城に拠り、滅亡したと伝えられる甲斐源氏の旗頭、また甲斐牧荘、加納荘領主でもあった安田義定に関して、すでに別章に述べられているので重複をさけるが、この城跡の麓には今日も城下、御所、馬場などの地名が伝えられており、とくに馬場では戦国の初期、武田信昌（信玄の曾祖父）と守護代跡部氏との間に生じた権力争い、馬場の合戦のあったところとされている。

ところで、この馬場の合戦に深い関係をもつことであるが、前記の小田野城は鎌倉期の安田氏のみ旧跡とすることはできず、守護代として専権の限りをつくしたとされる跡部氏も同城にかかり合いをもっていたのではないかと考えられている。

甲斐武田氏に関する有力史料の『王代記』寛正五年（一四六四）の条下に

跡部上野守西保小田野ノ城ニテ腹切

の一文がある。前述の馬場の戦いが長祿元年（一四五七）十二月二十八日のこと（高島緑雄氏『十五・六世紀における甲斐国人の動向であるから、跡部上野の自害は七年後となるが、正しくは『王代記』の記述に一年のずれがあり、干支によって訂正すると寛正六年のことになるわけで、従って跡部上野は馬場の戦いの八年後に小田野城で自害したことになる。

室町時代中期、甲斐守護職家の武田氏は、その内部にきびしい守護職継承をめぐる争乱を生じた。これは中央政府で

あった室町幕府と、その出先機関である鎌倉府の深刻な対立がそのまま武田氏内部に持ち込まれた形で、武田氏と逸見氏による甲斐守護職継承の宗家争いにまで発展、このため守護職に任命された武田信重などは入国もできず、高野山に身を潜めたり、あるいは四国あたりを流浪するという有様だった。

このような混乱の後、やがて甲斐守護の本流は武田氏の手にもどるが、弱体化していた武田氏にかわって守護代として権勢をふるうようになったのが跡部氏だったのである。

武田信重―信守と甲斐守護が受け継がれ、信守の子・信昌は父の死により、わずか九歳で武田宗家を相続、守護職を継承することになった。すでに権をほしいままにしていた跡部氏は、幼主信昌を迎えて、より一層勢力を強めるようになり、その専横ぶりは目に余るようになった。このころの跡部氏は『鎌倉大双紙』『一蓮寺過去帳』などによると、跡部駿河・上野父子の時代であった。

跡部氏は信濃守護職・小笠原長清の子、伴野六郎時長の男六郎長朝が、信州佐久郡跡部に住して氏姓を起こしたものと伝えられ、直接的には武田氏との血脈はみられない。跡部駿河は駿河守明海、上野は上野介景家と称した。

守護代跡部氏のアマリの専横に対して、武田信昌は一族の岩崎、栗原、吉田氏など主として東郡、中郡の武田方国人勢力を結集して立ち上ることにになり、両陣営の衝突が前述の馬場の合戦と見られている。史料的な裏付けを得ることはできないが、この八年後、夕狩沢の合戦（春日居町地内）で武田勢に打ち破られた跡部景家が、小田野城へ逃げ込んで結局自害したことを考え合わせると、跡部氏は小田野城を要害として手を加えていたものではなかったろうか。武田氏は石和に館を構え、跡部氏は岩下（山梨市岩下）に居館を置いていたものとみられており、『永昌院記』に示される「信昌、甲斐ノ国守トシテ石和ノ館ニ治スモ、彼地シバシバ水害ニ逢フヲ以テ、館ヲ岩下ニ移ス」とあるのは、跡部氏滅亡後のことと思われる。

さて、論をもどして、小田野城跡について古い塁跡とされるのが、中牧地内の浄居寺城跡(後の中牧城)である。浄居寺城には、甲斐源氏安田氏が頼朝に忌まれて滅亡したあと、おそらくこの安田氏の遺領を継ぐ形で比較的早い時期の入部を推測される牧荘領主・二階堂氏が居城としたところと伝承されている。二階堂氏についても別章で牧荘主として本町との係わり、また本町と特にゆかりの深い夢窓国師との関係などについて詳記されているので省略するが、『甲斐国志』に記載されている「浄居寺ノ城墟(城古寺村)」の一部を引用してみる。

(略) 里人ノ説ニハ安田遠州ノ築ク所ナリ。或ハ信玄ノ時コレヲ築キ、大村党ヲシテ守ラシムトモ云フ。按ズルニ、浄居寺ハ嘉元中ノ創スル所、牧ノ荘ノ主人、何人ナルヤ詳ラカナラズトイヘドモ、二階堂出羽入道蘊ノ采邑ナリシ由、惠林寺ノ旧記ニミユ。(中略) 永禄元年閏六月十日ノ印書ニ浄古寺ノ内、大村右京亮分三貫文、天正十年八月十一日御朱印ニ甲州常小地百貫文トアリ。今ノ城古寺村ハ界内方三四町、高百石ニ足ラザル狭村ニシテ、城郭ノ中ニ家居セリ。百貫ヲ貢スベキ地ニ非ラズ。(略)

浄居寺城跡は山城と一部が平山城形式となっており、武田信玄の時代に補修され、また武田氏滅亡後の天正十七年(一五八九)秋、徳川家康の命によって内藤信成の手で大改修が行われているため、中世の城郭としての遺構はわずかに土塁、空堀の一部にとどめられている。武田時代は文字通り秩父口守衛の要衝として大村氏一党がこれを守備した。

この浄居寺城につぐ要衝の遺構が、室町時代の倉科氏に係わる倉科地内の琵琶城跡である。倉科氏は甲斐守護・武田安芸守信満の庶子・倉科治郎少輔信広によって氏姓が起き(『甲斐国志』)、倉科氏の分流・向山氏の家譜によると、琵琶城はこの信広により応永年中(一三九四―一四二七)の築城と伝えられる。

『甲斐国志』は、琵琶城を倉科氏の居址としてつぎのように記している。

倉科氏ノ居址ハ、倉科村ノ西ニアリ。此ノ地、高敞ニシテ南ニ面シ、左右ニ流レヲ帯ビテ溪深シ。形、琵琶ニ似タリ。因リテ字シテ琵琶ノ城ト云フ。平生ノ館ハ此ノ下ノ久保ト云フ処ニアリ。今、里人ハ両処ヲ混ジテ琵琶窪ト呼ベリ。(略)

この琵琶城跡は実測によると、東西二百メートル、南北三百メートルの段丘地帯にあつて、東側に一〇―二〇メートル

ルの深い溝があり、西側は二〇―三〇メートルの急峻となつて天險を利用したものである。現在は桑畑と宅地になつているが、往古の屋敷割りの跡をとどめる四つ割り、八つ割りの土地と、城内鎮守稻荷の石祠、また御城堰の跡が残されている。

以上、列記した城塞、塁跡は、いずれも戦国武田氏以前のものであり、信玄は領国経営にあつて、本町の軍事上に果たす重要性を十分に認識した上で、これらの旧城塁に改修、または補修の手を加え、改めて重要拠点と定めたものであつたらう。

では、具体的に信玄の時代、牧丘町が軍事、戦略上にどのような観点から重く位置づけられたかといえ、その第一は武州・秩父口警固という要衝であつたことがあげられる。笛吹川沿いに三富―雁坂峠を経て秩父に通ずる「秩父街道」の関であつたことである。その第二は西保より赤芝を経て太良ヶ峠を越えれば武田氏居館の甲府・躑躅ヶ崎に通じ、このルートは躑躅ヶ崎の館側から見ると積翠寺・要害城の裏手、尾根越えで太良ヶ峠に至り、これより切差、水口、大工を経て八幡、岩手に通ずることもでき、また赤芝經由で中牧、諏訪(窪平)へ抜けられる間道口でもあつたことといえる。戦略上のルートとしても秩父街道の裏街道としての利用度があり、さらに国師ヶ岳、朝日ヶ岳のほぼ中間に位置する大弛峠を越えれば、信州・千曲川の上流、信濃川上村にも通ずることが可能であつた。

つぎに経済面で重要視されたのは、西保および杣口一帯が森林資源の宝庫であつたこと、なかでも武田氏の軍事財政を潤したであろう甲州漆の主要生産地であつたことである。

武田信玄は「富国政策」の一環として甲州各地の、主として山間部傾斜地で、米麦生産の耕地に適さない土地に対して漆樹の植林を奨励した。漆はいままでもなく漆器や蠟燭の主要原料であり、とくに武具甲冑類、刀剣、槍、弓などの補強、装飾の塗料として欠くことのできない必需品であつた。